



の一環だが、自衛隊の海外派遣の拡大に異論が噴出してきている現状で、政治的な意図を疑う声は多い。とりわけ在外邦人らに不評なのは、CMの最後に毎回登場する日本の首相「シンゾー・アベ」。日本の印象をどうしたいのか。(署名記事) 右の新聞紙面はその前半部分を示したものである。このようなCMが欧米で放映されていることは、在留邦人が挙げた「疑問の声」によって初めて国内にもたらされたもので、そうでなければ我々はこのような事実を知ることにはなかったに違いない。「日本の技術力や国際社会への貢献をPRするCMシリーズの一環」ということは解らないではないが、そこに自衛隊が登場してくるとなると話はややこしくなる。記事の見出しにもあるように、「軍隊PR 独裁国家のよう」と受け取られかねないことに対して、安倍首相の満面の笑みから想像すると、何の心配もしていないように見受けられる。こんなことで本当に良いのだろうか。

[2017年8月2日(水)]

○今朝の朝日新聞社説は『陸自日報問題 稲田氏まで隠すのか』と題して以下のように論じていた。「公開すべき文書を隠し、調査では事実関係をあいまいにして、果ては稲田前防衛相まで覆い隠そうというのか。南スーダン国連平和維持活動に派遣された陸上自衛隊の日報問題で、自民党が、衆院安全保障委員会の閉会中審査への稲田氏の出席を拒否すると民進党に伝えた。耳を疑う。即刻、これを撤回し、委員会に稲田氏を参考人として招致すべきだ。「大臣を辞任し、一番重い責任の取り方をした」。自民党の竹下国対委員長はそう述べたが、辞任しても国会に呼ばない理由にはならない。稲田氏はこの問題の直接の責任者であり、虚偽答弁が疑われている。問題を調べた特別防衛監察の結果は国会閉会後の7月末になってようやく公表され、同時に稲田氏が辞任した。だとすれば、監察結果を国会に報告し、質疑に応じるのが、防衛相の任にあった者としての最低限の責任である。稲田氏自身辞任を表明した記者会見で、国会から呼ばれば出席する姿勢を示していた。安倍首相も「国会から要請があれば政府として協力していくことは当然」と語っていた。「丁寧な説明」を誓った首相の言葉は「期間限定」だったのか。辞任後も稲田氏をかばい続けているとすれば、この問題に厳しい目を向ける民意を無視していると言うほかない。真相究明がうやむやでは再発防止策はたてられない。情報公開や文書管理、文民統制をめぐる議論も深める必要がある。稲田氏の招致を拒否する方針に、野党は「最悪の隠蔽工作だ」と反発している。多くの国民も同じ思いだろう。自民党は批判を真摯に受け止め、隠蔽を重ねるような振る舞いを改めるべきだ。ところが自民党の姿勢は全く後ろ向きだ。国防部会では「そもそも日報を公開するべきではなかった」との意見が続出した。情報公開法の開示義務違反と結論づけた監察の判断と正反対で、国民に説明を尽くそうとする態度からはほど遠い。二階自民党幹事長の発言が、安倍政権下の党の体質を象徴している。「自民党がいろいろ言われていることは知っている。だけど、そんなことに耳を貸さないで我々は正々堂々頑張らなくてはならない」国民に向き合わず、誰に対して「正々堂々」なのか。稲田氏を国会に呼び、質疑を通じて問題を解明する。政権与党として当然の務めである。」 どうしても理解できないのは稲田氏が辞任後に見せた不可解な笑みである。あの「笑み」の理由こそ、真っ先に知りたいものである。

○本日の朝日新聞天声人語の『アレppoのせっけん』が目にとまったのは、以前にシリアを訪問した際に、特産品が“アレppoの石鹸”であることを知り、お土産品として大量に購入して帰ったことがあったからである。以下にその天声人語を転載させて頂いた。「米誌タイムが今夏、「ネットでも最も影響力のある25人」に難民の少女バナ・アベドさん(8)を選んだ。「爆弾がいま雨みたいに降っている」「みんなハエのように死んでいる」「息がちゃんとできない」。母に教わりながら、英文ツイートでシリアの古都アレppoの惨状を世界

に発信した▼内戦の激戦地である。5年前から政権軍と反体制派の戦闘が激しくなりバナさん一家を含め大勢が国を出た。政権は昨年12月に制圧を宣言したが、緊迫はやまない▼たまたまではあるが、筆者は家で数年前からアレppo産のせっけんを使ってきた。保湿にすぐれ、肌にやさしい。内戦下で製造や輸出はとぎれなかったのだろうか▼「戦闘による停電や断水で製造が止まった。わが社の在庫も半減し、卸し先に頭を下げて回りました」。東京都福生市の輸入会社「アレppoの石鹸」社長の太田昌興さん(47)は話す。仕入れ先は創業350年のアデル・ファンサ社。2年の空白をへて、別の都市で製造を再開したという▼両社の連絡はメールが中心だ。内戦以降は返信が極端に短くなった。政情には一切触れず、泣き言もいわない。出荷状況を事務的に伝えるのみ。通話やメールの監視を警戒してのことだという▼難民として国を追われた人が惨状を訴え、国内に踏みとどまった人が沈黙を強いられる。弾圧と不信の渦巻く内戦の実相だろう。オリーブと月桂樹を原料とする泡の向こうに、「制圧」後もなお息をひそめて生きる人々の日常を垣間見た。」

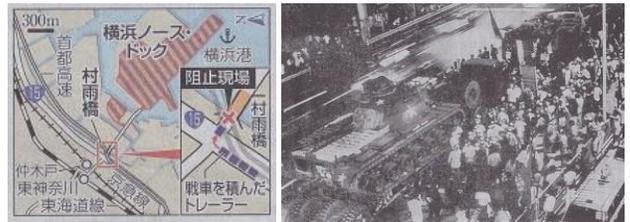


国内で販売されている“アレppoの石鹸”のパフレットの表紙

[2017年8月3日(木)]

- 昨日から内閣改造人事で騒がしいが、内閣支持率低下の元凶が首相本人や菅官房長官のリーダーシップのお粗末さにある限り、何も変わらないのではなかろうか。僅かに、野田聖子氏や河野太郎氏のアウトサイダーとしての頑張りに望みを託したい。
- 過日の日曜日に横浜市長選挙があったが、非常に白けた選挙であったことがっかりしていた。昨日の東京新聞横浜版に『自・民で「争点隠し」 検証・市長選 林さん当選の裏側』なる記事を読んで合点した。以下はその記事である。「横浜市長選で現職の林文子さん(71)はなぜ圧勝したのか。国政で自民への逆風が強まる中、横浜では民進が林さんを応援するか否かで分裂。与野党対決にならなかったことも一因だ。争点を隠す戦略や野党勢力の結集を図る思惑が交錯し、結果的に対決の構図を曖昧にした。(署名記事)「カジノで前向きな発言はするな。選挙で負けるぞ」。カジノに反対する世論が強まった昨年末、市議会定例会が終わった席で、民進のベテラン市議が市長の林さんに忠告した。12月議会で林さんは、カジノを含む統合型リゾート(IR)の導入について「横浜の成長のために必要」と答弁していたためだ。この民進市議は「選挙で勝たせるため林にカジノは封印させる」と、自民市議団へも根回しした。自民市連の横山正人幹事長は年末、取材に「カジノは争点にしない」と言い切った。林さんは今年に入り「判断に至っていない」と姿勢を後退させている。民進の旧民主系市議たちには、林さんにこだわる理由がある。森敏明市議は「8年前、林さんを担いだ責任と義理、人情がある」と明かす。それに加え「市議会与党」を標榜する旧民主系には、自公民の協力態勢の構築を目指す思惑もある。森市議は5月、86人の市議のうち自公民を中心に75人の得票で市議会副議長になった。民主系会派としては4年ぶりの副議長ポスト。「相乗り」の構図は既にできていた。この流れを民進の江田憲司・党代表代行は許さなかった。「カジノに賛成する市長は代えねばならない」と、昨年末の定例記者会見で表明し、候補者の選定に入る。「カジノを争点にすれば勝てる」と踏み、党勢拡大の機会をうかがっていた。市長選で毎回、独自候補を擁立する共産も今回は江田氏に協力する構えを見せた。次の衆院選をにらむ共産のベテラン市議は「野党共闘の大義のため」と強調する。昨年の参院選で神奈川選挙区は、与野党の候補者が乱立し、野党共闘は実現していない。ところが、江田氏の出馬の誘いに応じる人は見つからず、最終的に民進の横浜市長選だった伊藤大貴さん(39)に白羽の矢が立つ。伊藤さんは「市政課題を訴えて戦いたい」と主張。「野党共闘」の演出を優先する江田氏や共産系と交わることなく、市長選の選挙運動にも一体感はなかった。一方、1月に出馬表明した長島一由さん(50)は、早い段階から候補者の一本化に向け、知人を通じて江田氏に接触を図った。だが、関係者によると江田氏側の反応はなかったという。伊藤さんの出馬表明後、長島さんは江田氏側から「調整したい」と打診されたというが「今更遅い」と応じなかった。民進内の一貫性を欠く動きと、国政のうねりを市長選に持ち込もうとする流れは、現職へ正面から挑む新人候補者がある意味、置き去りにしていく。「政策で勝負したかったが、周りの状況と時間のなさが許さなかった」と、伊藤さんは悔しがらる。伊藤さんを支援した民進市議は「江田さんは影響力を落とし、分裂選挙で会派は消耗。誰が得をしたのか。有権者に説明できない」とため息をついた。」
- 本日の東京新聞に『憲法70年を歩く[6]横浜・村雨橋』との連載記事があって、「未明、米軍戦車止めた」「住民の声背景、自治体が権限生かす」と云った見出しに注目させられた。以下に記事の前半部分を引用させて頂く。「それは真夏の夜の夢だったのだろうか。むき出しの砲身が不気味に光る。その深緑色の戦車を積んだ5台のトレーラーは横浜港に向かう。午前1時前。北進してきた国道を右折すると、しかしもう前には

進めなかった。横浜市神奈川区にある村雨橋のたもと。腕を組んだ市民らが立ちはだかつて足を踏み鳴らし、座り込んだ。45年前。1972年8月5日のことだ。今年と同じ土曜日になる。当時、米軍は相模原市にある相模総合補給廠で戦車を修理し、横浜港の米軍埠頭施設「横浜ノース・ドック」からベトナム戦争へと送り返していた。この夜、警察は市民を強制排除できなかった。横浜市が重量オーバーで車両制限令に違反していると、通過を認めない新手に出たからだ。橋の上は市が管理者である市道だった。(途中略)ところが村雨橋の阻止からおおよそ2カ月後、政府は車両制限令を改変した。適用除外となった米軍の戦車輸送は再開された。今やノース・ドックの目と鼻の先は、ランドマークタワーや大観覧車もある洒落た港町に変わった。(以下略) 当時の横浜市長は社会党の飛鳥田一雄氏(後の日本社会党委員長)であり、ウィキペディアにも「飛鳥田市長時代はベトナム戦争の真ただ中だったことから、その在任中も反戦・反基地運動を継続した。代表的な活動として1972年8月、ベトナム行きの輸送船に積み込むため相模総合補給廠から横浜ノースドックへと向かう米軍戦車の列を、ノースドックへの進入路である村雨橋(神奈川区)の上で人垣を築いて足止めした「村雨橋事件」がある。」との記述があった。



市民が立ちはだかり、村雨橋の手前の路上で止まった米軍の M48 戦車=1972 年当時 (8 月 3 日付け東京新聞: 憲法 70 年を歩く [6] より)

[2017年8月4日(金)]

○今日の朝刊トップはもちろん昨日の内閣改造についてであった。東京新聞では『第3次安倍第3次改造内閣発足「スケジュールありきではない」首相が改憲姿勢を修正』との見出しの下で、次のように報じていた。「第3次安倍第3次改造内閣は3日午後、皇居での認証式を経て発足した。首相は官邸で記者会見し、自身が掲げた2020年に九条改憲を施行する目標について「スケジュールありきではない」と語った。今後の改憲論議は自民党主導で進めるよう求めた。内閣支持率の急落を受け、改憲論議を急ぐよう党や国会に迫る姿勢を修正した。自民党の高村正彦副総裁ら幹部も慎重に改憲論議を進める考えを相次いで表明した。首相は会見で、党に改憲論議を促す発言を続けてきたことに関し「憲法施行70年の節目で、憲法はどうあるべきか議論を深めていく必要があるとの考えから一石を投じた」と説明。その上で、秋の臨時国会に自民党の改憲原案を提出し、2020年施行を目指すとした目標には必ずしもこだわらない考えを示した。さらに「改憲は国会が発議するので、国会で議論していく。党主導で進めてほしい。これからは党で議論し、議論が深まることを期待している」と述べた。改造内閣の最重要課題は経済再生だとも強調した。首相は支持率が急落する中で改憲論議を強引に進めれば、国民の反発が強まりかねないと判断したとみられる。改憲は首相の悲願だけに、支持率が回復した場合、性急なスケジュールが再浮上する可能性もある。これに先立つ自民党役員会では、改憲の党内議論の中心的役割を担う高村氏が首相に「これからは党にお任せいただき、内閣は経済第一でやっていただきたい」と求めた。首相は「当然だ」と応じた。高村氏は記者会見で、秋の臨時国会への改憲原案提出に関し「一応目標としては出せばいいが、党内や各党の考え、国民全体の雰囲気を見ながらやる。目標は絶対ではない」と強調した。二階俊博幹事長、岸田文雄政調会長も同調した。」 昨夕の記者会見の冒頭で「加計学園」問題などで国民の不信を招く結果になったことについて陳謝した安倍首相であったが、写真のような頭の下げようは、これまでの疑惑はこれで全て幕引きですよと言わんばかりであった。まさかとは思うが、政治家ほど平気でウソをつく人種はいないので。



記者会見冒頭、「加計学園」問題などで国民の不信を招く結果になったことについて陳謝する安倍首相=3日午後、首相官邸で (8月4日付け東京新聞より)

2017年8月4日

文責：瀬尾和大